

行きをとりやめて奉天にもどった。この二週間は生死の境地をめぐり歩いたのである。

ようやく十一月末ころは治安は一応おさまったので、中隊長は自らハルビン大訓練所のあったところに着いて引揚げ準備にとりかかった。

青木氏らは奉天の満州車両会社のあった社屋で越冬して、お互いに給食のため牛馬の如き日常で労働を探して生きていた。昭和二十一年七月、コロ島から岐阜県関市のお家が家に引揚げるまでの苦勞を顧みるとき、引揚げられたのは青木一人の力ではない。全く神か仏か青木から離れず導いてくれたおかげです、と泣くのである。

引揚げてこれでも住む家がない、職はない。みな無いづくしである。あるのは満州から持参できた一千円だけである。家族をかかえている。青木氏は進んで下駄工場にお願いで労働者、山林地に入って伐採する。荷運搬する。のこぎりを引くなど何でもやる。

そうしたある日関市役所の採用試験で幸いにも採用されて以来三十二年間夢のように過ぎ定年退職した。

子供らがそれぞれ大学を出て家庭をもっている。

青木初老の夫婦は、どんなことがあっても戦争をしてはならないと、声をつまらせて語る。青木氏はいつの間にか習い覚えた、三味線を手には、得意の民謡を歌って社会福祉の施設や老人集会などに奉仕活動をして大変喜ばれている。

(世引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

青春の道程

愛知県 小林 保明

義勇軍志願

昭和十八年四月小学校最後の高等科二年となり、来年は卒業後の進路を決めなければならない。父は鉄道員になるのを希望していたようだった。ところが大東亜戦争も熾烈さを増して、一億国民総動員で、鬼畜米英撃ちてしまはん、欲しがりません勝つまではを合言

業に国民を鼓舞した時代であった。各家庭で使っていた真鍮のなべとか銅製品、又お寺の鐘までも強制的に供出させられ、誠に軍国主義一色であった。ちょっとでも反対する者ならだれでも警察に引っ張られ徹底的に取り調べられるのでだれ一人反対する者もなかった。

いつごろかわからないが、満蒙開拓青少年義勇軍の話があって、その年の夏休みを利用して、郡上八幡のお城の下あたりで、二泊三日の拓務訓練が実施された。だれと行ったのか、何人で行ったのかも覚えていないが、とにかく参加したことは確かである。

そうした時期に一年先輩で義勇隊の幹部候補生の二人が内原訓練所から帰郷していた。その人たちに会ったときは、とても格好が良くてあこがれたものだった。その時以来義勇隊もいいなあと思った。

小学校の高学年になったころは先生もよく代わった。若い先生は皆出征されたためである。代用教員もいてあまり勉強はしなかった。それより食糧増産のための竹藪の開墾とか勤労奉仕が多かったように思う。

担任の先生が義勇軍行きのお話をよくすすめるに來たが、

なかなか決心がつかなかった。一度家に來て両親と相談したこともあった。

いつごろ決めたかわからないが、お国のためと言う一途な気持ちから義勇軍に行くことを承諾していた。同小学校から九人の者が義勇軍に行くことになった。

門出

昭和十九年三月十三日が出発の日と決まった。当日は出征兵士を送り出す時と同じように、村の白山神社に全員が集まり、部落の人々が大勢集まって見送りに來ていた。みんなを代表してあいさつをしたが、胸がどきどきして上気してしまい何をしゃべったか分からないほどだった。後で父親が上手に出來たと言ってくれたので安心した。

村長の音頭で万歳三唱の後、歓呼の聲に送られて駅まで行進し車中の人となった。

その日のうちに全員が岐阜に集結し一夜を明かし、十四日の朝、結団式の後岐阜県庁まで行軍し知事の激励を受ける。岐阜駅より特別列車に乗り内原に向かつて出発する。

内原訓練所河和田分所に到着、日輪兵舎に入ったのは翌十五日の昼前だったと思う。昼食は井に少しのお粥と梅干し一つで粗末な食事であった。後で説明を聞いて納得した、それは長旅で体が疲れているからだと言ふ理由であった。

河和田分所での訓練や日常生活のことはほとんど記憶に残っていない。

渡 満

約二か月の基礎訓練も終わり、十九年五月七日が渡満と決まった。内原訓練所を出発して、途中名古屋駅で八分間の停車時間である。それが家族との面会時間であり、駅の構内は面会人でごった返しており、とても面会出来ないと思っていたが、発車寸前になってやっと面会することが出来てはっとした。父親と名古屋のおじさんであった、余り言葉は交わさなかったが饑餓を少しもらったような気がする。すぐに列車が動き出し挙手の礼で別れを告げた。

西條訓練所に一週間ほど滞在したが、そこでの出来事もほとんど覚えていないが、一つだけ梅林公園に

行った時、零戦だったと思うが超低空飛行で通過していった時の轟音が、今でも耳の奥に残っている。

船で玄界灘を渡る時は、船酔いで食事も出来なかった。釜山からの列車では、朝鮮半島を縦断したときに朝鮮の山々は赤土のハゲ山が多かった。いつの間にか鮮満国境を過ぎ、満州の広野に入ったときは、何と広い国だろうと驚いたものである。

ハルビン訓練所第一中隊に入所、その日は赤飯が出た。これはご馳走だと喜んでいたら毎日が豆ご飯ばかりで、うんざりした。又生まれて初めて食べたカレーが強烈のどを通らなかった。明るいとこで見たら真黄色でびっくりした。それと所長の訓話のときは、眠くて眠くて仕方がなかった。

十四、五歳の成長期で食べ盛りであり、一膳めしでは満足できる訳はない、いつも空腹状態のため、ある日野菜の貯蔵庫に入り、人参をかじって食べているところを運悪く中隊長に見つかり、大目玉をくって、あげくの果てに絶食を命ぜられた時はさすがに衝撃だった。そうした時は余計に腹がへって、馬の飼料にする

豆粕を食べたこともあった。

昭和二十年一月中旬頃に待望の炊事当番を命ぜられ、喜んで従事していたが一週間ほどして体の調子がおかしくなり、区隊に帰って寝ていたが、一向に良くならない。最初は胃の辺りが痛くなり、だんだんと腸の方に痛みが変わっていった。そのうちにめしも食べれなくなつた。

訓練所の病院に行き、診察してもらつたが病名は言わなかつたが、まだわりと元気であり歩いても何ともなかつた。病院の外で待っていると所長の車が来た。運転手が重病人だと思つていたので、元気な私を見て訝つていたが、看護婦に言われて納得したようだった。その車に乗せられハルビンの義勇隊の中央病院に連れて行かれ入院することになった。

その日のうちに手術することになった。盲腸炎である。今でこそ盲腸炎なんか病気のうちに入らないが、当時はまだ手術の技術も未熟であり盲腸の手術と言えども心配したのであろう。

背骨の腰の辺りに全身麻酔の注射をされ、胸から太

腿のあたりまでカミソリで毛を剃られ誠に大変な手術である。手術にかかった時間は五十五分と書いてあつた。

病室に入つて麻酔が切れてから、傷口も少しは痛かつたが、それよりもどに痰が引つ掛かり、それが気になって一晩中苦しんだ。傷口が痛むために大きく咳をすることができないし、小さく咳をしても痰が取れない状態であつた。

普通は一週間で抜糸し、十日ぐらいで退院できるはずが、傷口が化膿したため二週間以上かかつた。しかもまだ小さな傷口が何か所だけ塞がらない。おかしいなと思ひよく見たら中から結び糸が出てきた。それを取つたら二、三日で塞がった。

だがまだ退院することは出来ない。それは防寒服を洗濯に出したためである。一週間もすれば洗濯物は出来上がると思つて出したのに、待てど暮らせど出来上がつてこない。(中隊長日記によると、一月三十一日入院、三月八日退院となつている)結局は三月七日に洗濯物が出来上がってきたわけだ。

同病院に拓友の青木君も以前から入院していた。畜膿症の手術のためである。彼は入院生活も長く先輩たちとも仲良くしており、一度青木君に頼まれ街に出て饅頭を買いに行くことになった。病院を出る時は何ともなかったが、入る時は受付を通るため、青木君に面会と偽って入ったことがあった。

昭和二十年四月に第一次戦時勤労挺身隊として我が中隊より五十人、奉天の満州車両に出発した。続いて六月には百人が第二次として奉天に出発して行った。我々六十余人は、残留中隊として一区隊と二区隊に入り、それぞれ決められた作業を続行していた。

終戦

昭和二十年八月十五日、全員集合の声がかかり、これから天皇陛下の玉音放送があるから聞くようにとの指示であった。みんながラジオの前に集まり聞き耳を立てていた。ラジオの声は雑音が多く、声が小さくなったり、大きくなったりして聞き取りにくかったが、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」とだけが何とか聞き取れた。戦争に負けたんだ。みんなが信じられな

い気持ちであった。その時は放心状態であった。

戦争に負けたという初めての体験であり、何をしたらいいのか、わからないまま二、三日が過ぎていった。そのころ中国人が訓練所の倉庫を目がけて襲撃して来たのを応戦しに行つて来たのだれかが話していた。そのうちソ連兵が東満から侵入して来た。

北満の奥地から避難民がハルビンの街へどしどし入つて来た。その人たちが学校などに入れなくなつて、ハルビン訓練所にどんどん回されて来た。見る見るうちに我が中隊も一杯になつていった。

侵入して来たソ連兵は、略奪した日本軍の被服を早速作りかえて着て、そのまま駐屯して訓練所の守備にあつていた。非番のソ連兵はすきを見て、先を争つて避難民の宿舎を回り、悪逆非道の限りをつくし、そのうえ腕時計や万年筆の略奪に専念していた。

彼等は略奪した腕時計を両腕に何本も巻き付けていた。又万年筆は胸のポケットに何本も並べて得意になつていた。

当時の日本人の常識から言えば、時計や万年筆は日

用品であつて、決して珍しい品物ではない。それなのにソ連兵には貴重品であつて、奪つたものの、その取扱ひも出来なかつた。時計の竜頭を回すことも、万年筆のインキを入れることも知らず、日本人に教えてもらつていた。

凱旋も近いソ連兵には時計と万年筆が故郷への最高の土産と考え、競つてせつせと集めたのであろう。それを持つて帰つたソ連兵の得意そうな顔が思い浮かべられる。

丁度そのころ、だれに聞いたかわからないが、拓友の藤本君が狂犬に噛まれ苦しんでいると知り、見舞いに行つたことがあつた。

そこには大勢の病人が所狭しと横たわつていた。藤本君はその中程にいて足に白い包帯をして寝ていた。左足だったか右足だったかは、はっきりしないが毛布一枚にくるまり何かしら痛々しかった。少し話をして慰めたが、とにかくガーゼを取り替える時は物凄く痛いと言つていた。それもそのはずふくらはぎの部分が空洞になつており、そこにガーゼが詰めてあり、それ

を取り替えるのだから痛いわけである。

その後、見舞いに行く機会もないまま過ぎ去つてしまつた。帰国して何年か過ぎ彼が死亡されたことを知つた。当時は充分な手当ても出来ず、さぞ心残りであつたらう。

あの混乱の中で非業の死を遂げた人々の何と多かつたことか、藤本君もその一人として不運にも若き命を異国の地で散らされたことを思うとき、今でも胸が痛む。さぞ両親の元へ帰りたかつただらうに。

大陸行

熱い八月も終わり九月に入つたころ、日本に帰れるといううわさが流れた。みんな嬉々として帰国の準備に入つた。各自持てるだけの荷物をリュックサックに詰め、その他に毛布一枚と軍靴一足を余分に持つて、避難民と一緒に新香坊の駅まで歩き、無蓋車に乗せられ、行先もわからず列車は走り出した。

列車に乗つたとき隣にいた避難民のおじさんが「余分な軍靴ならわしにくれんかね」と言われたので何の考えもなくやつてしまつた。

途中列車が止まるたびに中国人が大勢集まってきた、手に手にトウモロコシやマントウなど持って売りに来たが、我々は欲しくても金はなく、やむを得ず余分な軍足や衣類などと交換して飢えをしのいだ。

牡丹江の手前までくると鉄橋が落ちており、それから先へ行けなくなり、全員汽車を降りて歩くことになった。夜になって激しく雨が降ってきた。途中で野宿することになり、暗やみで炊事をし食事を終えて毛布をかぶり震えながら寝た。

朝になって河の中を見ると日本兵の死体が散乱しており、気分が悪くなってしまった。

雨に濡れた毛布は重くなり、そのうちどこかへ無くなってしまった。捨てたのも知れない。

ようやく海林に着き兵宮跡らしき所で寝起きすることになった。そこで生水を飲んだのが悪くアミーバ赤痢にかかってしまった。

生水を飲んだときにコールドの臭いがしたのを今でも覚えている。当時は薬もなく、栄養のある食物もないのによく生き延びることが出来たと思う。

そのころ一緒に横で寝ていた藤田君が、死亡されたことはおぼろげながら覚えている。おそらく同じ病気だったと思うがその人の寿命だったのだろうか。私信、死ぬなんてことは一度も考えなかったし、また生きる希望とてなく自然のなりゆきにまかせた感じであった。

自分の顔を鏡で見えていないのでわからないが骸骨のようではなかったろうか。テレビで見た難民の子供が栄養失調で今にも死にそうな映像を見る度に当時のことを思い出し良く無事で今日まで生き永らえてこれたものと感謝している。

義勇軍の総会で拓友の若林君が「小林、よう生きていたなあ、てっきり死んだと思っていた。初めて会った時はびっくりしたぞ」と言い、その後会うたびにその話を聞いた。そんなに病気がひどかったかなあと思ったりもした。同じ建物にいて世話をしてくれたのはだれだったろうか。

当時はとにかく便所へ行っても少し出るだけで、横になるとまたしたくなる。その繰り返しでねむる間

もなかった。

アミーバ赤痢だとは知らずただの下痢だと思い子供心に抹茶を飲めば治ると思い、水筒に茶の葉をたくさん入れそれを飲んだりした。

海林を出発して牡丹江に行き、そこでの生活そして再びハルビン訓練所に戻ったこと。その間の二週間余りの記憶が全然なく、半分死にかかっていたものと思われる。あるいは三途の川を渡りかけていたのか。その二週間余りの空白を何と説明したらいいだろうか。もし海林でも牡丹江でも置き去りにされたなら、今日の私の人生は無かったかも知れない。あの時受けたご恩は生涯忘れることは出来ない。

あの空白の時代以来戦前の小学校時代、義勇隊時代の楽しい出来事が脳裏から消え去り思い出すことが出来なかった。

ハルビン訓練所に戻ったころから意識が少しずつ戻って来た。我々の中隊の宿舎は避難民で満杯で仕方なく指導員訓練所に入った。ここでの生活は元氣な者はソ連兵の使役に行っていたようだが、私は病氣上が

りでふらふらしており一度も使役には行かなかった。

ある夜、ソ連兵の黒パンを掻っ払いに行ったことが一度だけあった。黒パンを二つほど盗って来て皆で食べた。今思えば空おそろしい気がする。もし発見されたら殺されたかも知れないのである。

指導訓練所での生活をしている間に一人、二人と抜け出し、隊員も大分少なくなったころ、鷲見君と鈴木君と私の三人で相談して街で働くことに決め、ある朝早く宿舎を抜け出した。お金がないので何か金目の物と思つたが適当な物がなく、三寸角の二問物の角材を一本ずつ担いで香坊の街へ歩いていった。私はまだ病氣上がり、ふらふらしながら角材を担いで両君に付いていった。街に着くと中国人が話しかけて来たが全然言葉がわからず、ある飲食店に入ったところ、そこで働いていた先輩らしき人が通訳してくれた。一日五日で羊飼いをやらないか、と言うことだった。

別に行くあてもない身でありそこで働くことにした。食事も終え馬車に乗せられかなり遠くへ行ったようない気がした。時期は十月下旬ころではなかっただろうが

少し寒くなっていったようだ。

ようやくある部落に着いたが、部落名も知らないままそこで生活することになった。三人一緒だったので何の心配もなく、また、これといった仕事もないまま、毎日毎日三度の食事をいただいでぶらぶらしていた。私にとっては体力を回復させるのに絶好の機会であった。

やがて正月になり、初めて中国料理を食べさせてもらった。出てくる料理をガツガツ食べていると、次から次と出てくるので終わりがろには満腹になり最後の方は食べきれなかった。

その家では毎朝豆腐を作っており、それを見ているのが日課のようであった。普通の豆腐ではなく、乾豆腐といって、厚さ一、二ミリぐらいで幅は二十センチほど、長さ四十センチぐらいに仕上げるわけだが長い晒を使って折り込みながら仕込み最後に万力で絞って出来上がりだ。時々おかずの中に入れていたが、あまりうまいものではなかった。売りに出していたようだ。

大きな瓶に入れ、「ニガリ」を入れて分離しかかった豆乳を茶碗にすくってよく飲んだものだ。そのせいか今でも豆腐が好物である。

ある日二人と別れる日が来た。それは大家の親戚の家に働きに行くため、私が選ばれたのである。一月の寒い日、道路には雪が積もっていた。馬そりに乗せられ防寒服を頭からかぶりかなり遠い所まで行ったような気がする。着いた所は四方が土塀に囲まれており、正面には大きな扉があった。家族は祖母と父母、兄と妹二人の六人家族であった。兄は日本語が少し話せたが、あまり話す機会もなかった。

仕事は主に水汲みとかまどの火焚きであり、時々家畜に餌をやったりした。火焚きは、朝、昼、晩と三度あり、日本のように薪は使わず、きび穀と枯れ草で、使う量だけ運んで焚いた。

毎日の食事は、粟と玉蜀黍が主食で、粟はゆがいて食べたし、玉蜀黍は砕いた物をドロドロになるまで煮て食べた。生ねぎを畑から採ってきて味噌をつけてよく食べた。最初は味噌がなかなか口に合わなかったが、

なれるにしたがいうまく感じた。

その家で旧正月を迎え、小遣いとして二十元ももらったが使うすべも知らないままにいつの間にかどこかへ消えてしまった。

旧正月用として豚を一頭殺して料理した。始めにのど首を切って血を抜き、それを器に受けて置き最後に腸詰にする。次にうしろ足の一本に少し切口をつけ、そこから皮と身の間鉄の棒を差し込み、全体に空気を吹き込んでパンパンにし、湯につけながら毛を抜きとる。きれいになったら皮付きのまま小さく割って一部を残し、一度水炊きにし保存していた。

手作りのギョウザも食べたし、一度だけだったが米の飯も食べさせてくれた。いつころだったろうか、保存用の瓶に入れてある豚肉の小片を盗み、ふとんの中で食べたときのおいしかったことは今でも忘れられない思い出の一つである。

ある日鷺見君がひょっこり遊びに来たことがあった。中国語でよくしゃべっていたことだけを覚えてる。

又ある時期、中国人の使用人と一緒に寝起きしたこ

とがあった。まだ二十二、三歳の若者であった。共に畑仕事をした。名前は聞いたが忘れてしまった。

しばらくここで世話になったが、その家を出る羽目になった。それは珍しさもあって鷺鳥の卵を一個かすめ、隠していたのを見つけられたのが原因であった。相棒と二人で畑仕事に出掛けている間に老婆が見付けたのである。それが元で喧嘩となり、面白くなかったので一日中、内側から鍵を掛けて仕事をさぼった。そして夜中にその家を飛び出してしまった。しかし困ったことに西も東もわからず、地平線が街の灯りではほかに明るくなっている、その方角に向かって道なき道を一人とぼとぼ歩いて行った。途中、犬の遠吠えを聞きながら、とにかく街へ出れば何とかなるだろうとそれしか考えなかった。

ある部落に来たとき八路軍の歩哨につかまっってしまった。「だれか」と声をかけられたがとっさに返事が出来なかった。

八路軍の中隊に引っ張っていかれ、いろいろ質問されたが全然わからなかった。そのうち軍隊あがりの日

本人が二人きて通訳をしてくれた。どこに行くあてもない身であり八路軍に入るようになった。その時、怖さと寒さのためか少しふるえていたようである。いままでの持ち物は不要となり部落民に五元で売り、これで義勇隊関係の品物は全部なくなってしまった。

八路軍に入隊したのは四月の初めころだったと思う。その部落に少しの間いたが間もなくハルビン方面に向かつて行軍して行った。街の少し手前でまた駐屯した。それはソ連軍が街にいるからだと聞かされた。

我々の中隊は大きな倉庫らしい場所で寝起きしていたが、あまり外へは出なかつたように思う。何週間かが過ぎて又ほかの場所に移動した。

そのころ、街の理髪店に働いていた九州延岡市出身の橋口澄敏と名乗る人を八路軍に引き入れた。散髪が出来るからである。中隊内でよく散髪をしていた。私も二、三人の頭を剃ってやったこともある。

中隊長付であった私はほとんど訓練に参加しなかつた。よく八路軍の歌と一緒に歌ったが意味がわからなのまま歌っていた。今でも一部分なら歌うことが出来る。

る。

ハルビンの街に駐屯してからは、匪賊討伐や荷馬車の護衛をした。匪賊討伐（国府軍かも知れない）に行った時、ある部落を攻撃したが、我々は小高い丘に陣取り銃撃戦が展開された。生まれて初めて弾の飛んでくる音を聞いた。「ヒューンヒューン」と単発で聞こえるのは小銃弾の音であり、機関銃は三、四発連続に聞こえる。あまり気持ちの良いものではなかつた。

夜になって戦闘は一段と激しさを加えたが、重機関銃の曳光弾は実に美しかった。二、三人怪我人が出たが、朝になって部落に攻め入ったところすでもぬけの殻であつた。

また荷馬車の護衛はある部落から農産物を馬車に積み込み、何十台もの隊列を組みハルビンの街まで輸送するのを護衛する役目である。それは各馬車に分散して乗っているだけで案外楽であつた。途中、道路脇の畑からマクワ瓜をもらって食べたりもした。

八月も終わりに近づいたころ、八路軍ともお別れの日がきた。それは前に入れた橋口君が原因であつた。

九州の人は気が短いのか、中国人とよく喧嘩をしたためである。ちょっとしたことですぐ怒りっぽくなる性格なのか、日本人としての誇りが許さないのか、毎日のように喧嘩ばかりするのである日、中隊長に呼び出され、ハルビンで最後の引揚げがあるから日本へ帰りなさいと言ってくれた。

せん別として軍票で五百元と夏の中国服（更衣）上下を支給してくれた。二人で街に出てギョーザを食べたが一人前二十元であった。

引揚げ

橋口君と二人でハルビンの街をぶらぶらしながら日本に引揚げるために、引揚者の宿舎に行き手続きをして避難民と一緒に帰国することになった。その宿舎にいたときまだ夏の暑い盛りであったので、近くの松花江に二人で泳ぎに行った。パンツなど穿いていなかった。なので素裸だったと思うが、得意になって泳いでいたときに橋口君が面白がって中国人の小舟の船尻につかまって遊んでいたら、その船頭が猛烈に怒って持っていた竿でたたかれたことがあった。

泳ぎを終え服を着ようとしたら、上衣がなくなってしまったと思ったが後の祭りであった。仕方なくズボンだけ穿いて宿舎に帰り責任者に事情を話し、大きめの上衣をもらい何とかこうだけついた。

ハルビンを出発して帰国の途についたのは九月に入ったころであった。人数はどれほどいたかわからないが女子や子供が多かったようだ。それからの引揚港コロ島までの道程も決して楽ではなかった。列車に乗ったり、歩いたりしながらの難業苦業であった。ましてや子供連れの荷物が多い人は大変だったろう。

その時子供連れのおばさんにフトンを運んで欲しいと頼まれ運ぶことになった。手ぶらであったので心よく引受けた。礼金として二百五十円もらった。フトン自体そんなに重くはなく二枚か三枚を布で包んでそれを背負って運ぶわけである。そんな時、なぜか鼻血が出たこともあって、となりにいた人にやめるように言われたが、前金をもらっているので途中でやめるわけにもいかずコロ島まで運んだような気がするが定かでない。

コロ島で乗船前の検査があったが、我々は着のみ着のままであったので検査官も素通りである。しかし持ち物の多い人は貴重品など取り上げられた人もあったようだ。

乗船したのは貨物船であった、船名も知らないし、大きさもわからないがそんなに大きな船ではなかった。船に何日乗っていたのかわからないが、ほとんど甲板にいたようだ。たまに下に降りていって人々の話を聞いていると、食べ物の話ばかりである。どこそこの菓子はうまかったとか、どこそこの饅頭はおいしかったと戦前の思い出話ばかりであった。

船内での食事は余り記憶に残っていないが一度は乾パン（非常食用のもの）を七、八個の支給があった。それでも幸いなことに、一緒にいた人が岐阜県の出身で安江と言う人でくわしいことは聞かなかったが、とても親切な人でいろいろお世話になった。特に食事については毎食のように米のめしをご馳走になった。おかずは何か覚えがない。ご飯を炊くのもお釜ではなく細長い容器で、船の蒸気を利用して蒸していたように

ある。タバコも時々もらって吸っていた。

それほどお世話になりながら安江さんの住所も聞かず、お別れしたことが今でも心残りになっている。

上陸したのは博多港だったと思う。DDTの白い粉を体中に吹きかけられ、真っ白になって後でよく見たらシラミが全部死んでいた。良く効く薬だなあと驚いた。とにかくノミやシラミやナンキンムシにはほとんど手を焼いていたので余計に薬の有り難さがわかった。上陸後に、初めてにぎりめしを二個もらいそれを食べたときのおいしかったことを今でも忘れられない。やはりお釜で炊いたご飯はおいしいわけだ。

毛布一枚と下駄一足を支給され、それを持って田舎に帰る前に町をぶらぶらしていた時八百屋の前で沢庵を見つけ食べたくなって、十円か二十円で一本買ってもらって食べて下痢をしたことがあった。

汽車の中での記憶はないが、越美南線刈安の駅に降り立った時、なんと狭い道路だろうと思ったのが第一印象であった。

岐阜県郡上郡美並村の我が家に帰る途中で名古屋か

ら疎開していた叔母さんに会った時は、無事に帰って来たことを喜んでか、余りにもみすぼらしいかっこうをしていたのでわからないが涙ぐんでいた。

我が家に着いた時は両親は留守だったのでがっくりしたが、夕方田んぼから帰って来て我がことのように喜んでくれた。

農家の二男である私はいつまでも我が家におるわけにはいかない。二か月ほど休養して親戚の紹介で大津の東洋レーヨンに就職してやっと我がいる所を得た。満州時代の苦しかった体験をもとにして真面目にやった。その後刈谷の工場に移り、そこで定年を迎えた。

【執筆者の横顔】

尋常小学高等科を卒業した小林少年は、昭和十八年四月、二泊三日の拓殖実施訓練に参加し、あこがれの開拓に大きく活眼を開いていた。卒業生九人とともに満蒙開拓青少年義勇軍に志願して合格、県知事から激励をうけ、村長始め大勢の方々から送ってもらって、責任を感じ誇りをもった。内原訓練所で二か月の訓練

をうけて、昭和十九年五月七日名古屋駅から出発するに際し、父親はわざわざ駅頭で送ってくれた。小林少年は父親の顔をみながら挙手の礼で別れた。十五歳だった。

釜山から朝鮮を縦断してハルビン大訓練所第一中隊に入り、生まれて初めてカレーライスを食べた。訓練に学習に繁忙をきわめたが、すぐ空腹になるので、ある日食糧倉庫から人参を盗んでかじっていたところを中隊長にみづかり怒られたことがある。

昭和二十年八月十五日、全員集合させられて、天皇陛下の放送を聞き、がく然として泣きわめいた。訓話する所長の両眼に光るものをみた。

それからと言うものは、ソ連兵と暴民化した満州人から手あたり次第の略奪、暴行をほしのままの悪事乱行ぶりにあう。小林氏も時計や万年筆はソ連兵に略奪された。訓練所の指揮命令系統は絶無となり、自らの判断で最も良しと思う考えで生きのびてくれとの隊長の方針に従い小林氏は同志らとハルビンから日本へ引揚げたい一念で徒歩から無蓋車に乗ったり歩いたりし

て牡丹江に着いてみると前進できなくなり、そのうちアミーバ赤痢にかかったり一層の苦痛が重なり半死半生の姿で牡丹江からハルビンに戻った。この間二週間だったが、もしおき去りにされたら今日の小林が無かったと語る彼は泣いている。

ハルビンでは訓練所のあった部屋に寝泊まりして市内の満州人の商店の使用人、羊飼いの使用人、材木屋の運搬人などで働いて一日五円をもらって生きていた。その後、八路軍につかまされた。口説かれて八路軍人になった。二十一年四月から隊長付きだったので訓練は無かった。八月になったら、我々はハルビンを引揚げから、貴殿は日本へ帰った方がよいと言って、中国服と五百円のせん別をもらった。

小林氏はハルビンからコロ島について、運よく乗船し、博多港に上陸、毛布一枚と下駄一足の支給をうけて故郷に帰って両親兄弟と泣き笑いの感激である。

三か月ほど静養して大津の東洋レーヨン会社の社員に採用となり、定年まで三十有余年つとめた。

日本民族永遠に発展するために、どんなことがある

うとも二度と戦争をしてはならない。

生と死が一緒に住む極限の社会生活を切り抜けられるのは真があればできるという体験は貴重なものと思う。と誇りをもって語る言葉を力強く承った。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城吉之助)

風雪流れて四十有余年

愛知県 奥村 数夫

昭和九年の初春三月三日であった。美濃太田駅から四人の同僚と共に多数の職員に激励されて勇躍神戸港に向かった。当日埠頭に集結した名古屋鉄道局管内職員は、総数千八百人ほどであった。それぞれ青年職員は誠に意気旺盛で、大陸滿蒙の鎮護者ならんと大志を抱き、岸壁に横付けされた真っ白な巨船に乗船した。埠頭まで父が見送りに来てくれた。しばしの別れを惜しむ。父はいかにも寂しそうで無言のまま私の手を堅